
2015年

第21回吃音ショートコース

2015年11月21日～23日

エンパワーメント 内なる自分の力の再発見

第21回目の吃音ショートコースは、過去20年間、様々な分野の第一人者をお迎えして、みんなで学んできたことの総まとめをしようと考えています。

論理療法、アサーション、交流分析、認知行動療法、サイコドラマ、アドラー心理学、当事者研究、ゲシュタルトセラピー、ナラティブ・アプローチなどを、伊藤伸二が「吃音を生きる実践地図」として、これまでの吃音ショートコースを整理して提案します。

これまでの学びの総集編です。

その総まとめの場に同行して下さるのが、大阪セルフヘルプ支援センターと一緒に活動した北野誠一さんです。北野さんは、最近、『ケアからエンパワーメントへ - 人を支援することは意思決定を支援すること - 』（ミネルヴァ書房）を出されました。このエンパワーメントが、私たちが大切にしている、内なる自分の力、レジリエンスとつながります。

北野さんと一緒に、過去20年間で、学び、得てきたものを振り返り、これからの新しい展望を探りましょう。参加者の皆さんも、その場で、自分のこと、グループのこと、自分の周りのことなどを振り返り、今後の展望を考えていただければうれしいです。

ご参加をお待ちしています。

《講師》北野 誠一（きたの せいいち）

1950年生まれ。桃山学院大学教授、東洋大学教授を経て、現在、おおさか地域生活支援ネットワーク理事長。西宮市権利擁護センター運営委員長。著書として、『ケアからエンパワーメントへ - 人を支援することは意思決定を支援すること - 』（ミネルヴァ書房）など。

日時 2015年11月21・22・23日（土・日・祝日）

場所 アクティブラザ琵琶 〒520-1503 滋賀県高島市新旭町深溝 0740-25-7111

主催 日本吃音臨床研究会

〒572-0850 寝屋川市打上高塚町 1-2-1526 TEL/FAX 072-820-8244

参加費 一般参加者 33,000円 日本吃音臨床研究会会員 31,000円
（研修費、2泊3日の宿泊・食事を含む全ての費用）

問い合わせ先 日本吃音臨床研究会

〒572-0850 寝屋川市打上高塚町 1-2-1526 TEL/FAX 072-820-8244

プログラム案 (~ の内容は変更の可能性あり)

8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

21日(土)

受付			夕食		コミュニティアワー
----	--	--	----	--	-----------

22日(日)

朝食			昼食				夕食			コミュニティアワー
----	--	--	----	--	--	--	----	--	--	-----------

23日(祝)

朝食			昼食	
----	--	--	----	--

21日(土)

出会いの広場...新しく出会う人が互いに知り合い、リラックスできるように、からだを動かしたり、ゲームをしたりする、人間関係づくりのウォーミングアップ。

オープンマイク...吃音ショートコースのこれまで、そして今。初参加の方には、今回の参加動機を話していただきます。過去参加したことのある方は、印象に残っているショートコース、ショートコースで出会った人のことばやできごと、そして、もし、ショートコースで学んだことを日常生活に生かしていることがあればそのエピソードを話していただきます。初参加の人にとっては、20年のダイジェスト版を体験できます。

発表の広場...どもる人本人は自分の体験を、どもる子どもの親は子どもとのかかわりでの体験を、ことばの教室担当者やスピーチセラピストの方は実践を、研究者の方は研究を発表し、参加者全員で分かち合います。ことば文学賞の発表も行います。

コミュニティアワー(交流会)... 参加自由の交流会。

22日(日)

みんなで作ろう、吃音哲学実践地図...これまでの20回の吃音ショートコースで学んできたことを、<吃音を生きる>に活かしていく実践地図を伊藤が提案します。さらに、参加者が自分の体験を語り、グループで話し合いながら、その実践地図を豊かなものにしていきます。

講義・ワーク... と と を受け、北野誠一さんに、講義やワークをしていただきます。

コミュニティアワー(交流会)... 参加自由の交流会。

23日(祝)

対談...北野さんと伊藤が対談します。

みんなで語ろうティーチン...参加者全員で吃音ショートコースを振り返ります。

参加申し込み方法

宿舍予約の関係で、11月11日を申し込み締切とします。はがきかFAXで請求いただければ、所定の申し込みはがきと参加費送金用の振替用紙をお送りします。申し込みはがきと同時に、振替用紙でご送金下さい。部分参加の方は参加費をお問い合わせ下さい。

発表の広場での発表者募集

成人のどもる人は自分の体験を、ことばの教室の担当者や臨床家の方は実践を、研究者の方は研究報告を、どもる子どもをもつ親の方は、子どもとのかかわりから得た体験を、発表して下さい。発表ご希望の方は、参加申し込みのときに、その旨お知らせ下さい。追って、発表の広場の要項をお送り致します。発表の概要を事前にお出しいただきます。

オープンマイクで話すことの準備を

これまで参加した吃音ショートコースを振り返って、印象に残っていること、出会った人やできごと、心に残っていることばなど、3分以内で話せるよう準備して下さい。日常生活に生かしていることがあれば、そのエピソードもぜひご紹介下さい。

問い合わせ先

日本吃音臨床研究会 〒572-0850 寝屋川市打上高塚町1-2-1526
TEL/FAX 072-820-8244

今なぜセルフヘルプグループなのか

大阪セルフヘルプ支援センター 北野誠一（桃山学院大学）
<朝日新聞福祉ブックレット「セルフヘルプグループ」はじめに>

現在日本には何千というセルフヘルプグループが存在します。それでも、欧米のあまたあるセルフヘルプグループから見れば、わずかな数でしかありません。

ひとりで悩み、苦しみ、絶望してきた人たちが、同じ悩み、苦しみ、絶望を生きている人たちと出会った時、そこにはこれまで誰にも話せなかった、あるいは理解されることがなかった悩み、苦しみ、絶望を“分かち合える”場が生まれます。

セルフヘルプグループには、他者による無理解、無関心、偏見、蔑み、同情、あわれみなどはありません。また、セルフヘルプグループには、専門家による支配も、命令も、指導も、アドバイスも、励ましも、受容もありません。

ただそこには“はばかりことなく思いのたけを話せる場”“唯一話す気になれる場”が存在します。“分かち合う”ことによって自らの存在を否定することなく“あるがままで生きる”ことを受け止め合えれば、私たちは“生きる”ことができます。そのことを可能にするのがセルフヘルプグループだとすれば、セルフヘルプグループとはずいぶんありたがたいものだし、うれしいものです。

この朝日福祉ガイドブック『セルフヘルプグループ』は、そのような仲間と“めぐり合おう”とし、“わかち合おう”とし、そのためにセルフヘルプグループを文字どおり切り拓いて、その誕生に立ち会ってきた人たちによる、喜びの書です。

12人のセルフヘルパーに書いてもらったのは、主に次の3点です。

- ・グループをつくろうとしたきっかけや、グループづくりを思い立った出会いや状況
- ・グループを立ち上げてゆく時の困難さ、労苦、楽しさ、喜び

・グループを維持、展開してゆく時のたいへんさ、抱え込まざるを得ない困難や危機や危険、そして、それを乗り越えたり、やり過ごす知恵と方法

それぞれのセルフヘルプグループの生誕と活動を通して、セルフヘルプグループとはいったい何であるかを理解して欲しいと、私たちは願っています。

実を言うと、大阪セルフヘルプ支援センターは設立準備委員会のころを含めると、かれこれ15年間、セルフヘルプグループとかかわってきましたが、いまでもメンバー全員の一致したセルフヘルプグループの定義を生み出せていません。セルフヘルプグループの奥行きと広がりを考えれば、それでいいような肝しますが、何でもセルフヘルプグループと言われてしまうと抵抗もあります。私たちのメンバーの中には、セルフヘルプグループの草分けであり、自らの原理原則を12のステップや伝統という形で確率しているAA（ALCOHOLICS ANONYMOUS）のメンバーから、やっと生まれただけで、まだ会則も方向性も手探りのグループのメンバーまでいます。

それでも、私たちが大阪セルフヘルプ支援センターに集まって、共通の土壌で語り合い、支援し合っているのは、同じ原則を大切にしていこうという思いがあるからにはほかなりません。

例えば“はばかりことなく思いのたけを話せる場”“唯一話す気になれる場”つまり“わかち合いの場”であるためには、メンバー間に支配や上下関係があったり、あるいは、指導的な部外者や専門家などがいては成り立たないことを、セルフヘルプグループはその体験から体得してきています。また、時に障害の重い軽いや、治療が進んでいる・進まないといったことで、メンバー間にしこりやわだかまりができる時があります。病気や障害を治したい、軽減したいという気持ちは誰もが持っている当たり前ですが、グループがそのことだけを目的とするならば、それは、トレーニングの回や勉強会として別個にもたれるべきものでしょう。このような会では、目的に合ったよくてせきる人とそうでない人との間には溝ができます。それは、同じ悩み、苦しみ、生きづらさの“分かち合い”でも何でもありません。

このように、病気や障害や嗜癖を持つおのれの生の“生きづらさを分かち合う”ことができなければ、セルフヘルプグループではないことを、私たちは体験から体得し、会得してきたように思います。

というわけで、この本ではセルフヘルプグループの一般的な定義ではなく、12のセルフヘルプグループのセルフヘルパーの体得、会得したものを通して、読者一人ひとりがセルフヘルプグループとは何かをつかみ取ってもらえればと思います。セルフヘルプグループの大切さ、かけがえのなさを一人でも多くの人たちに知ってもらえればと心から願っています。

また、今、仲間を求めている人には、多くのストーリーからつかみ取って欲しいと思います。そして、今、仲間を求めながらも、自分に必要なグループが存在しない人には、12人の“先行く先輩たち”が、どのようにすれば“私とともに生きるセルフヘルプグループ”を生み出すことが可能なのかを指し示してくれているのです。

そして、セルフヘルプグループに関心を持ったり、セルフヘルプグループと関わりのある専門家や関係者の人々には、高松さんの「セルフヘルプグループと専門家とのかかわり」と、12のストーリーに展開されている、それぞれのセルフヘルプグループと専門職との関係が大いに参考になるでしょう。

セルフヘルプグループは専門職や関係者にとって、安上がりで便利なただの“社会資源”なのではありません。セルフヘルプグループは専門職や関係者を含む社会全体のあり方そのものを変えてゆく21世紀の“社会資源”なのです。